

1930年代の機械美における音声的側面

—— 「映画音」と「音画」理論の有機性について

立命館大学 王 琼海

1920年代後半から、産業資本がもたらすさまざまな機械的イメージが日本で流通し始め、未来派と構成主義の影響を受け、新たな美的対象として注目された。機械美を論じる代表的なものとして、美学者中井正一の論文「機械美の構造」(1929)があった。そこで論じられたのは、ギリシヤ的な技芸的模倣からロマン主義的な天才的独創を経て、再び技術が回帰することで、個人的なものが揚棄され、集団的なものが美の原則として確立することであった。

高島直之(2000)は、中井の主張に対して、全体として機械美の「視覚イメージを論じているにすぎない」とした上で、その独創性を機械による人間の拡張に位置させ、とりわけ映画における視覚の問題、中井が「映画眼」と呼ぶ理論を中心に論じた。しかし、中井が主張する「機械美」の問題は視覚的だけではなく、「映画音」と呼ばれる音声の側面もあった。この音声的な側面について、先行研究では言及されているものの、詳しく検証されていなかった。本発表では、この機械美における音声的側面を明らかにするために、有機性に関する二つの視点を導入する。

まず、中井のテキスト「機械美の構造」と「リズムの構造」(1932)を再検討し、その独特性を示す。一つは、当時他の論者が主に「機械美」を新たな美的対象として捉えたのに対し、中井はそれを対象ではなく、部分と全体の組織関係として捉えた。二つ目は、機械的に反復する数学的リズムと、偶然と瞬間が入る心的リズムが、集団の時代において統合され、部分と全体が有機的に組織されたトーキーのリズムになると主張した。機械美に対するこれらの独特な解釈からして、「映画音」を視覚と聴覚の有機的な組織関係を指した概念だと明らかにする。

次に、映像と音声の有機的關係性を指す言葉として、1930年代の映像評論界で盛んに使われた「音画」を導入する。とりわけ、中井から影響を受け、機械美にも積極的に言及した今村太平の『漫画映画論』(1941)を参照する。今村は産業資本主義がもたらした革新が人間の認知を次のように変化させたと主張した。まず聴覚において、雑音の日常化と音楽のラジオ化が、両者の境界線をなくし、雑音を楽音に吸収して体系的に運用する現代音楽を準備した。次に視聴覚において、日常生活の一シーンが音楽、雑音と偶然的に重なる視聴環境は、視聴覚のリズムを打破し、映画における視聴覚の不一致の称揚、所謂垂直のモンタージュを準備させた。

中井と今村は共に機械美の音声的問題をある有機的な組織形態として考えたが、本発表では最終的に哲学における有機性の概念を明らかにしたユク・ホイの『再帰性と偶然性』(2019)を参照し、偶然的なものを取り入れることを条件づけた再帰的機械の組織性、機械的有機体論として両者を位置づけ、機械美の問題をこの組織性の元で再解釈する。